

# 充実した人生を送るために

## 後輩に伝えたいこと

【第61回】



医療法人光臨会  
荒木脳神経外科病院  
理事長

荒木 攻

### 個儻不羈の人生

いつの頃からか、同志社の創立者新島襄の遺言の中にある言葉「個儻不羈」を座右の銘とするようになった。誰にも御されることなく自らの信念のもとに行動してきた自分に符合しているように思ったからである。このため、波風の立つことも多かったが、私も70歳を過ぎて、「七十にして矩を踰えず」といった境地に近づいてきている。

今の若い世代は大人しく、画一的、優等生的な人が多いように感じる。もっと確たる信念のもとに荒々しく、個性的で、少しはみ出したような人がいても良いのではないか。即ち、「個儻不羈」なる人たちが。

#### プロフィール

荒木 攻（あらき・おさむ）

1943年生まれ、広島県出身。69年、広島大学医学部卒業、70年、同大医学部第二外科教室入局。75年、第16次南極地域観測隊越冬隊員として1年間昭和基地に勤務。その後、広島大学医学部脳神経外科教室、(財)倉敷中央病院脳神経外科医長、荒木脳神経外科病院院長を経て2000年から現職。医学博士、脳神経外科専門医・指導医、日本脳卒中学会専門医、日本体協公認スポーツドクター。

第20回日本臨床脳神経外科学会会長、日本臨床脳神経外科協会理事、(社)広島県病院協会監事、広島県病院企業年金基金理事長、広島脳神経外科協会評議員。

(少林寺拳法関係)  
1965年に入門(本部道院192期)。66年広島大学少林寺拳法部創設・初代主将、74年広島基町支部・2代支部長。広島県少林寺拳法連盟顧問、少林寺拳法広島県大学同窓連合会会長、中四国学生少林寺拳法連盟同窓連合会会長、少林寺拳法正拳士・四段。

### 私の大学時代

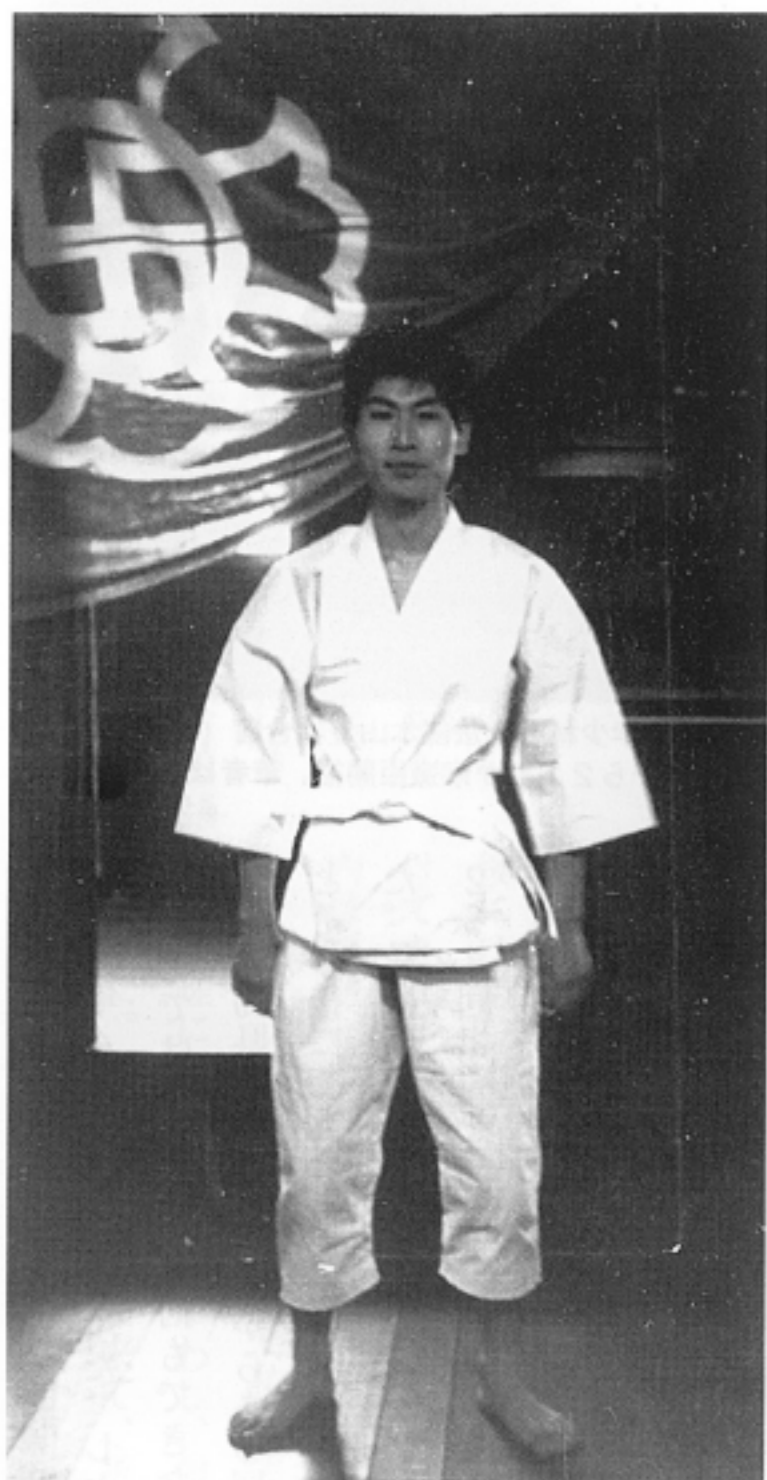
私が広島大学医学部に入学したのは1962(昭和37)年で、60年安保闘争の余韻が強く残っていた。戦後70年余の歴史の中で政党、学生、市民大衆を巻き込んだ国民運動がこれほどまでに盛り上がった時代はなく、既成概念や秩序の変革を問われ、まさに激動の中の青春であった。全学連は内部分裂をし、内ゲバと称する暴力が横行して大学キャンパスは荒廃していた。学外で

も多数の一般学生がデモに参加し、機動隊と衝突した。そのたびに、私は強くなりたと思うと同時に虚無感にとらわれていた。一方でこのような活動に興味を示さない者はノンポリと呼ばれ、あたかも愚か者呼ばわりをされた。開祖宗道先生(以下、開祖)の目指された「理想境」へは現在でもなお程遠い道程であるが、当時、理想社会を目指し「革命」という手段で短兵急に達成しようとしたことは明らかに誤りであった。

### 少林寺拳法との出会い

このような時代背景の中で苦悩し、自身自身の人生の目標を見失いかけていた。将来は医師になるという目標があることすら、混乱の中で忘れてしまっていた。そんなある日、書店で立読みをしていてふと目に止まったのが、開祖が著した『秘伝少林寺拳法』であった。「秘伝」とか「門外不出の技」というところに学べば強くなれるという思いと、医学に係る「整体医法」に妙に引かれ、その本を買って図解された技を友人相手に掛けてみたが、かかるはずもなかった。

どうしても少林寺拳法を学んでみたいという思いが日増しに募り、思い余って開祖に手紙を出したら、来てみるというお返事をいただいた。香川県多度津町の管長公館に開祖を訪ね、開祖から約1時間半お話を伺った。私は少林寺拳法の技を学ぶことを目的として開祖の元を訪れたのだが、開祖の目指しておられたのは少林寺拳法を通し



入門当時の筆者(1965年)



広島大学少林寺拳法部本山夏期合宿（1966年）。前列左から2人目が宗道臣開祖。筆者は2列目左端

て正義と勇気と行動力のある人を一人でも多く育て、この世に理想境をつくりたいとお考えであった。理想社会実現のための革命思想に否定的になっていた私は、開祖のお話が私の進むべき道だと思うに至った。すぐさま入門をお願いし、本部道院192期生として入門を許され、私の少林寺拳法の修行が始まった。

### 広島創生期の少林寺拳法 指導者の不在

1カ月間、本部道院で見習い拳士として

場を潜った。そのいくつかを紹介するが、少林寺拳法を学んだからこそ、切り抜けることができたのだと思う。

#### ▼その1 勤務医時代

ある病院の夜間当直勤務の時のこと。男性入院患者で無断外出をして飲酒をするため、強制退院の指示をした。すると逆恨みをした患者がビール瓶を割って向かってきた。その瞬間、病室内は凍てついたが、私は不思議と恐怖心はなかった。自然と八相構をとって相手に対峙した。睨み合うこと数分、警官が駆けつけて、その患者は連行された。医師として、相手より先に手を出すことはできない。まさに「守主攻従」の技と精神だった。

#### ▼その2 同じく勤務医時代

脳神経外科医として勤務していた頃のこと。男が病院に乗り込んで来て、男の知人の女性の治療について難癖をつけてきた。この女性には形成外科医と共同で治療にあっていたので、私と形成外科医が呼び出された。男は、治療が手遅れになった、どうしてくれると大声で恫喝する。そして私

少林寺拳法の修行に励み、3級を允可され、65年4月に広島に戻った。しかし、3級拳士ではいかにせん何もできない。当時、広島県内には、古くからある尾道道院とその後にできた呉海上自衛隊支部があった。私は呉海上自衛隊支部にお願いし、週2〜3回指導を受けた。夏休みには本山に帰山し、他大学の少林寺拳法部の夏季合宿に参加させてもらい、修行に励んだ。今では考えられないスピードであるが、入門から6カ月で初段、準拳士を允可された。

早速、広島に戻って同好の士と共に大学少林寺拳法部創設に向けての準備に入った。創部に向けての最も大きな課題は指導者の不在だった。入門して半年しか経っていない私にとって、三法25系六百数十の技があるといわれる少林寺拳法を他人に指導することなどできるはずもない。しかし、この問題を解決しないことには創部はおぼつかない。少林寺拳法は剛柔一体という特徴をもっているが、ことに柔法は一手一手、手を取って指導を受けないと修得できない。あらゆる機会を活かして技の習得に

に身体をすり寄せ、手をズボンのポケットの中に入れチャカチャカと音をさせ、さも凶器を持っていると言わんばかりの振る舞いをする。私は押されても押し返し、一歩も退かなかつた。治療について落ち度は一切ない旨を説明すると、相手は脅しても何也得られないと悟り、帰って行った。無手であっても自分の身を護れるという自信の裏付けがあつてこそ、このような場面で怯むことなく応じることができたのである。

#### ▼その3 病院開院したところ

新規に病院を開くと、何かあれば文句をつけ脅して金にしてやろうという輩が寄ってくるものだ。

ある時、院内で殴られてケガをしたと男の患者が病院を脅してきた。この患者の背後には暴力団があり、さまざまな脅しをかけてきた。男は刺身包丁を振りかざし、院内は騒然となった。男は私が診察中の外来まで入り込み、その包丁で私を突いてきた。咄嗟に私は右下受でかわし、包丁を取り上げた。間もなく警官が来て、その男は連行され、その後、背後の暴力団からの脅

励んだが、それは試行錯誤の連続であった。このような状況は、翌年66年、近藤道文先生（愛媛・西条道院）の高弟・本田修先生が大阪より転勤をしてこられるまで続いた。

その後、広島は少林寺拳法は本田先生の尽力により、一気に開花した。広島大学から始まり、大学少林寺拳法部が次々と設立され、道院もつくられた。広島大学は66年8月、本山夏期合宿を初めて行い、その年の12月には広島大学体育会3周年記念演武会にも広島工業大学と合同で出場した。そのような曲折を経て現在に至っている。

誰しもが社会に出て管理者の立場に立つた時、管理者は部下を育て、かつ自らも成長しなければならぬ。その後、自分が社会に出て、この時の苦勞した経験は極めて貴重なことだったと初めて理解できた。

### 護身錬胆

少林寺拳法の「三徳」の一つに「護身錬胆」がある。私は医師になって何度か修羅

しもピタリとなくなった。

### おわりに

今の私は少林寺拳法の稽古からは遠ざかっている。接点があるのは、関係団体の顧問、会長という立場であるが、顔を出すと自分の故郷に戻った気がする。若き日に情熱をかけたことは、何年経っても風化せずに輝いて残っている。

今、医療法人の経営を手掛ける私には、開祖の「一人、人、人すべては人にある」という言葉が改めて思い出される。それは医療の世界においても「病院の差は、中で働いている職員の差」であり、開祖の説かれた「一人づくりの道」がいかに大切で、かつ難しいことであるか痛感させられる。

「個儻不羈」という言葉を座右の銘として掲げて歩んで来た人生には、周囲との間に軋轢、摩擦、波紋を生じたことも多々あったが、信念をもってこれを貫くことは悔いのない充実した人生を送ることになるのではなからうか。